

上級の読解授業

——同一教材を多目的に利用した授業——

春名万紀子

0. はじめに

1993年度春学期に上1の読解を担当した。早稲田大学の『日本語教科書上級 I』を読む時間のほかに、週2コマ(3時間)は別のものを扱うことができた。これは、その時間に試みた授業内容についての報告である。

授業の目的は四つあった。第一は、学生に「学習読み」の習慣から抜け出させて、「さがし読み」や「あらすじ読み」のストラテジーを活用して読む速度を上げさせることにあった。第二は、語彙、表現の拡充を図ること、そして、第三は、意見や考えを述べあうことで口頭練習をすることだった。第四は、現在の日本社会に対する理解を少しでも深めるのに役立つ情報を与えることだった。授業では、一つの教材がこのような四つの目的を持って扱われた。

1. 「学習読み」からの脱却

初級段階の読解指導では、語彙、文型、漢字を文章の中で扱っていく場合が多い。北條(1973: p.71)は、このような「文章をこまぎれにし、自由に分断し、部分部分を深く知るという方法」を「学習読み」と呼んでいる。「学習読み」の習慣がきっちり身に付いている真面目な学生ほど、何を読むにしても文章中の総ての未習の語彙を辞書で調べ、文の構造を分析しないと、内容の理解に進めない傾向がよく見られる。これでは、当然、読む速度は遅くなるし、却って内容把握がうまくできないことも多い。上記の

北條(1973: p. 71)も、「学習読み」が「文章全体に流れている文意を無視する結果にもなる」と指摘している。山本(1988: p. 269)も「一つ一つの語を正しく認知しながら読もうとすればするほど内容把握を難しくするといった傾向を生み出す」と述べている。

細部にとらわれすぎるときらいのある「学習読み」の対極にあるものとして、佐藤(1979: p. 129)のいう「細かい読み方ではなく、あらっぽく、大まかに(といっても、いい加減に、という意味ではない)、要するに少しぐらい分からないところはあっても気にせず、大体の内容がつかめればよい、という、そういう読み方の態度」が考えられる。佐藤はこのような読み方を「粗読」と呼んでいるが、一般に「速読」といわれているものとほぼ一致している。ただ、速読では、目の運び方等の物理的な側面も含めて、読む速度を上げる工夫が考えられるのに対して、ここに言う粗読は内容のつかみ方を問題としているのである。

学生の日本語での読みの速度を速くすることが目標ではあるが、授業でまずやらねばならないことは、辞書に頼りすぎ、構文の分析に目が向きすぎて、大要がつかめぬ読み方を直すことにある。そのような読み方が改まれば、結果として読む速度は速くなるはずである。したがって、授業は粗読に慣れさせることを中心に据えた。

2. 教材

教材は新聞から採った。フィーチャーものの記事、コラム、投書等を扱った。

読むという作業において、読者は自分の持っている知識、情報を活用しながら、テキストの理解を進めていくものと考えられる。したがって、読者がその内容に関する知識、情報を持っているもののほうが速く読めるであろう。小川(1991: p. 83)は、「教材として新聞、雑誌の記事を用いる場合は、現在起こっており、学習者が普段他の情報源からも触れているトピックを用いるのが読者とのインターアクションを最も生むものであろう」

と指摘している。

授業の目的の一つに、今の日本の姿を知る手掛かりになる情報を学生に与えることがあった。この目的と上記のこと、さらに会話の話題にしやすいという条件を考え合わせて、教材には、現在日本の社会で起こっている、話題性のある出来事や事象を取り上げるように心掛けた。

ここに紹介するような形態で授業ができたのは、9回だった。使用した教材は、総て今年(1993年)の「朝日新聞」から採ったもので、次の通りである。なお、以後これらの教材に言及する際は、教材に付けた番号を使用する。

- (1) 学生稼げず鈍行の旅(3月15日)
- (2) 天声人語：丸刈りと校則(3月7日)
- (3) スポーツ透かせばニッポンが見える：相撲(4月19日)
- (4) ひととき：27歳未婚は罪ですか(投書)(4月17日)
- (5) ひととき特集：結婚して一人前なの？(上記の投書に対する反響)
(4月30日)
- (6) 窓：社員旅行(4月10日 夕刊)
- (7) 天声人語：チキンスープと味噌汁(6月7日)
- (8) ヒラも社長も皆「さん付け」：狙いと効用(3月27日 夕刊)
- (9) TV 時評：電話番号の語呂合わせは時代や世相を映す(6月22日 夕刊)

3. 粗読の指導

小川(1991：p.83)が「特に速読において、テキストを読み始める前に、扱うトピックについて簡単に討論などをして頭の中を準備しておく必要がある」と指摘しているが、授業ではこの“頭の中の準備”に二つの方法を採用した。

一つは、教科書で読んだものとの関連づけである。しかし、この方法が採れたのは、2例だけだった。教科書の第11課「テレビとストレス」を

読んだ時に、日本のサラリーマンについて話し合い、「社員旅行」や「会社人間」等の語彙も入れておいた。そして、この課が終わってからの授業で教材(6)の「社員旅行」を使用した。また、(8)の「ヒラも社長も皆『さん付け』」を使う前に、教科書の第22課「人を表すことば」で、上司や部下、同僚の一般的な呼び方を勉強した。

もう一つの方法としては、読む作業に入る前に必要な“紹介”を教師がした。先に述べたように、読む内容は現在の日本の姿を反映しているものとしたので、学生にとって馴染みのない語彙を含むものもあった。特に、教材(3)の相撲に関するものは、「親方」、「幕内」等の語彙を紹介しておかなければならなかった。(9)の「TV時評」では、語呂合わせとはどんなことであるか説明する必要があった。

読むための準備が終わったところで、本文と本文の内容に関する質問のプリントと語彙表を配り、全体を読み通す、通読の作業をさせた。語彙表は、未習の可能性がありそうな漢字を含む語彙をリストアップして、その漢字の読み方を付けただけのもので、訳語は付いていない。学生は漢字の読み方が分からなければ、未習の語彙を辞書で引けないという事情と、多くの日本語の語彙が文字からではなく、音だけで入っている日系の学生がいたということから、このような語彙表を作った。このクラスには中国からの学生はいなかったが、彼等の場合は、語の意味は分かるが日本式の読み方の分からないことが多い。彼等に漢字と音声を結び付けさせるのに、このような語彙表は役立つ。

辞書が引けるように語彙表を渡してあるのだが、学生には、辞書を引くのは最小限にするように言った。文脈から類推できるものや、意味が分からなくても文意の把握に支障を来たささないと思われるものは、辞書に頼らずに読み進むように指示した。

次に、質問に目を通させて、それに答える作業をさせた。学生は、質問を読んでから、その答えを探しながら本文を読み返す。この作業において、学生は読みながしてもいいところ、詳細に読む必要のあるところを意

識しながら読むことになる。

質問は大体10題とした。回答方法は、二、三例外はあるが、○×式とした。これは、答えるのにも、答え調べにもいちばん時間がかからないという理由からである。回答用紙は、出来た者から順に提出させ、その場でチェックして返した。

全員の回答のチェックが終わったら、学生に順番に段落ごとに音読させながら、皆で答え調べをした。このレベルの学生でもまだ発音やアクセントの誤りが多いので、音読は有益と思われる。また、皆で答え調べをしながら、間違った学生にはどこを読み間違っていたのかを考えさせた。

4. 語彙、表現の拡充

このレベルの学生にとって、いかに語彙、表現を拡充するかは大きな課題である。一つの教材を粗読しただけで、新出の語彙や表現形式の定着を図るのは無理があると思われる。そこで、2コマ目の授業では、同じテキストをこの目的に合わせて使用した。

再度音読させて、漢字熟語の文字と音声、意味を再確認させた。読むという行為において、黙読のほうが音読より速い。したがって、速読する際、学生、特に中国の学生は、音声をほとんど意識することなく読んでいると考えられる。しかし、音を知っているということと語彙の定着には密接な関係があるように思われる。小川(1991: p.84)は、音を知っているということが、漢語が持つ意味や情報を記憶として保持していくために少なからざる役割を果たしている可能性について言及すると同時に、そのことが文章を文節単位で視覚的に認識してゆくプロセスを無意識に支えているようだと言っている。

同一、あるいは似通ったトピックを扱ったものを複数読むことは、重複して出てくる語彙の印象を強めることになり、記憶を促すと考えられるし、そのトピックに関連する語彙を広めることにもなる。教科書で読んだものとの関連づけについては前述した通りであるが、授業では教材の内容

に関連した別の記事を出来るだけ読ませるようにした。例えば、教材(1)を扱った時は、バブルが崩壊する前の学生アルバイトについての記事「人気バイトは短・近・高」(朝日新聞 1991年5月18日)を読んだ。(6)に関連して「しみつく会社人間」(朝日新聞 1993年5月15日)を扱った。(9)の語呂合わせを読んだ時は、教字の語呂合わせを扱った「フジ三太郎」(朝日新聞 1986年11月6日)の四コマ漫画を用いて、語呂合わせのやり方やおもしろさを一緒に考えた。

5. 口頭練習

上級レベルになると、授業が口頭練習より読解中心になる傾向があり、学生からもっと会話の練習をしてほしいという意見が聞かれることがよくある。そこで、1コマ目の残り時間は、読んだものについて感想や意見等を交換する時間に当てた。学生の発話する機会を多くすると同時に、読解教材に出てきた語彙や表現を使う練習もできる。新出の語彙、表現を目で読み、次に音読し、さらに別のコンテキストの中で能動的に使用することは、それらの記憶を大いに促すと思われる。この点に関しては、高木(1980:p. 30)も「読解教育は、単に読むだけでなく、話すことと総合させることでより一層の効果をあげうることになる」と指摘している。

授業では、学生が読んだものの内容に関係するような実際の経験を話すことが多かった。そして、他の学生がその経験談について質問をしたり、意見を述べたり、別の自分の経験を話したりして、会話が発展した。また、自国での場合との比較もよくなされた。例えば、(1)の鈍行の旅の記事を扱った時は、実際に「青春18切符」を使って旅行したことのある学生がクラスにいたので、その時の話から会話が始まった。(2)の丸刈りについて読んだ時は、ドイツの学生が軍隊では自分も髪を短くしなければならなかったことや、いろいろ規則があったこと等を話した。上役も部下も「さん付け」で呼ぶ企業が増えてきているという記事(8)を読んだ際は、アメリカの学生が英語を教えているアルバイト先の会社がやはり「さん付け」を

実行していることを話した。(9)の語呂合わせを話し合った時には、英語やドイツ語でも歴史の年代や、数学の公式等を覚える工夫に、日本語の語呂合わせとは異質ではあるが、言葉(文)が使われていることが分かり興味深かった。

結婚に関する投書(4)は、量的にも少なく、内容も易しかったので、授業に時間的余裕があった。それで、話し合う前に、感想を書かせた。

6. 再検討を要する点

このクラスは6人と少人数であったことと、読むスピードを上げることそのものより、まずは「粗読」に慣れさせるということを目的にしていたことから、読ませる時に原則として時間を限らなかつた。一人だけ読むのが非常に遅かったので、あと何分でペンを置くようにと指示したことが、2回あった。しかし、学生数が多くなると、読む速度にもっとばらつきがみられるであろうから、読む時間を制限する必要が出てくるのではないだろうか。また、読む速度を上げることが第一に考えるなら、時間制限というプレッシャーがあった方がいいのかもしれない。

読む時、辞書の使用は本人の自由に任せた。それは、授業のためではなく、自発的に読むという行為をする時のパターンに近付けたかったからである。私たちは、何かを読んでいて知らない語に出くわした時、辞書を引くこともあれば、文脈からの類推に頼って読み進むこともある。

しかし、読む速度を速める訓練としては、辞書を使わずに、文脈からの類推に頼って読む練習に徹する方がいいとも考えられる。そうするためには、教材に出てくる新出語彙の数をある程度抑える必要がある。北條(1988: p.241)は、「既習の文型、語彙を中心としていくつかの未習語の意味を文脈から類推できる程度の、学習者には負担にならない、筋立てのはっきりしたもの」が速読に向いているとしている。実際には、上級クラスの学生は自国で様々な教科書を使って日本語を学習してきているので、何が既習であるかは各自で異なり、それをきっちり把握するのは困難であ

る。

辞書を使用させない場合、キーワードとなるような語彙に関しては、語彙表に訳語を付けることも考えられる。ただ、母国語を異にしている学生集団の場合や教師が学生の母国語に通じていない場合等は難しいこともある。

小川(1991: p. 82)は、精読で語彙の拡充を図ってから、新しく導入された語彙をオーバーラップさせた速読をさせる方法を提唱している。このような精読から速読への順序を踏めば、先の北條の言う速読に適した教材も選びやすくなると思われる。この点だけを考えると、今の日本社会の姿を反映するもの等という条件を付けなければ、速読教材を教科書で扱ったものとの関連で選ぶことも一考であろう。

7. おわりに

授業の目的を一つに定めず、一回の授業にいろいろな要素を持ち込んだことが良かったのかどうか疑問が残っている。しかし、学生の要求、興味、得手、不得手が一律ではないのであるから、このような授業ではそのどこかに各自がそれぞれに要求しているものや興味を持てるものを見出せるのではないだろうかと思う。

参考文献

- 小川貴士 1991 「読みのストラテジー、プロセスと上級の読解指導」『日本語教育』75号
- 小川貴士 1993 「読みにおけるコミュニカティブ・アプローチについて——上級読解クラスの一試案——」『日本語教育』80号
- 北條淳子 1973 「上級クラスにおける読解指導の問題」『日本語教育』21号
- 北條淳子 1988 「中・上級の指導上の問題」寺村秀夫編『講座日本語と日本語教育 13巻：日本語教授法(上)』明治書院
- 佐藤 喬 1979 「対象論」佐藤喬編『読み方の指導』英語教育ライブラリー 3 開隆堂
- 高木きよ子 1980 「中・上級の読解指導」国立国語研究所『中・上級の教授法』日本語教育指導参考書 7

- 谷口すみ子 1991 「思考過程を出し合う読解授業：学習者ストラテジーの観察」
『日本語教育』75号
- 山本一枝 1988 「読解力の養成法」寺村秀夫編『講座日本語と日本語教育13巻：
日本語教授法(上)』明治書院